

Ulysses における病とケア

第 18 挿話 “Penelope” を中心に

田中恵理

序

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の *Ulysses* (1922) 第 18 挿話 “Penelope” は、肉体／身体が重要なテーマの一つとされる。ところが、人間の身体経験でもある「病」に注目した論考はあまり多くはない。そこで本発表では、*Ulysses* 第 18 挿話を中心に、病がどのように描写されているか、またそうした描写にどのような意義が見出せるかを考察した。当時のアイルランドの医療言説を参照しつつ、ジョイスの作品において病人をケアする者として描かれる人物像についても検討した。

1. モリーの身体への不安と自己検閲

モリー・ブルームの内的独白を綴った “Penelope” には、モリーが自身の身体の不調、特に婦人科系の病を気にしていると読み取れる箇所がいくつかある。例えば、“who knows is there anything the matter with my insides or have something growing in me getting that thing like that every week when was it last I Whit Monday yes its only about 3 weeks I ought to go to the doctor” (U 18.1149-51) はその一つである。「何かが私の中であってそれが大きくなって」いたり「毎週そのようなものがあつた」り、月経がいつもよりも早く始まったと考えていたり、婉曲的な表現で不安が吐露されていて、それは医者に行かなければと考えるほどである。年齢的にも 30 代半ばのモリーが婦人科系の病を発症する可能性は十分にある。そう考えると、モリーがこの日ほとんどの時間をベッドの中で過ごしているのも、月経前症候群 PMS や体調不良で動けないからかもしれない。モリーの夫レオポルド・ブルームはそんな彼女のために朝食を運ぶケアラーとも言える。

20 世紀初頭、婦人科系の病の一つである子宮頸がんの治療としてラジウム治療が一般的だった。ジョイスの妻のノラ・バーナクル (Nora Barnacle) も 1928 年 11 月 44 歳の時にラジウム治療を受け、そのすぐ後に子宮摘出手術を受けたと伝えられている (Ferris 114)。注目すべきは、当時女性生殖器の摘出は身体的な病の治療だけでなく、女性の精神的な病の治療としても用いられていた点である。卵巣切開術も始めは癌など生理学的治療のためであったが、それがヒステリーやニンフォマニアの治療としても用いられるようになり、健康な卵巣でさえも摘出された (Plock 134)。当時の医学理論によって月経周期と精神状態とのつながりが構築され、それが広く信じられていたためである。

そうした背景からモリーの婦人科系の病に対する不安を捉えると、そこには、単に病気が怖いというだけでなく、女性異常者としてレッテルを張られ医者から暴力を受けることへの恐怖が読み取れる。モリーは、婦人科医を生体解剖者のイメージと結びつける文化的言説を認識していて、婦人科医による手術が女性の性的逸脱に対する事実上の罰であったと理解していた (Plock 135)。つまり、先の引用にみられるような身体の不調や月経不安をめぐる婉曲的な表現は、精神異常や性的逸脱と見なされるのを避けるためのモリーによる自己検閲と捉えることができる。

2. 他者の病を語るモリー

一方で、モリーは、他者の病については明示的に語っているところもある。例えば、元恋人の軍人ガードナーが “enteric fever” 「腸チフス」で亡くなったと考える。また、初恋の相手のマルヴィとの思い出を想起しながら、“consumption” 「肺結核」がうつるかもしれないと不安に思ったことやナンシー・ブレイクが “acute pneumonia” 「急性肺炎」で亡くなったことを考える。これらの病は、20 世紀初頭にアイルランドで流行した病であり死に至る確率が高かった。こうした死と隣り合わせの病がモリーの語りを通して描かれている。登場人物が他者の病を語る時、そこには、その人物が他者に意識を向け、苦しさや痛みなどを想像していることが示唆される。実際、モリーの語りの中には罹患者に対する同情や共感が示されている。例えば元恋人のガードナーについては、“killing any finelooking men there were with their fever if he was even decently shot it wouldnt have been so bad” (U 18.865-68) と、腸チフスで死ぬより撃たれて死んだ方が良かったと独特な考えを示すが、ここには、名誉の戦死ではなく病死した兵士の惨めさや辛さに対するモリーの同情が示唆されている。ただ、こうした他者意識の高さは、彼女が自分自身の病に対して恐怖や不安を感じているその現れとも言える。

とはいえ、モリーが直接的な表現を避けている、つまり暗示や自己検閲がかっている他者の病も示唆されている。それは社会的にタブー視されていた性病である。性病は当時アイルランドでも大流行したにもかかわらず、公にはできない病だった。もちろん、モリーが梅毒に罹っているという描写はないが、キャサリン・フェリス

(Kathleen Ferris) は、夫ブルームが梅毒に感染している可能性を指摘する。もしブルームが梅毒患者であるならば、生後 11 日で亡くなった息子ルディの死因は先天性梅毒であるとも言える。そうであるならば、性病をめぐるモリーの語りには、夫を介しての性病感染という自分と同じ恐怖を抱える妻たちへのエンパシーが読み取れる。

3. ケアの視点から

モリーの語りから読み取れる他者の病への共感、「ケアの精神」に通じるものではないだろうか。これまで他者や弱者への気遣いややさしさというテーマでは、夫ブルームが取り上げられてきた。しかしながら、モリーも他者の病に対して同情や共感を示す人物であり、そこには、感染症の蔓延や医学言説によって生み出される病や死、社会的排除への恐怖や不安が暗示されている。とはいえ、モリーが示すケアは、いわゆる従来のケア——女性が行うとされる病人の看護や子供の育児、夫の世話、高齢者の介護——の形とは異なる。モリーの示すケアというのは、ジェンダー化され自己犠牲を伴うようなケアの構図をなぞるものではなく、むしろ揺るがすものであると読み取れる。

キャロル・ギリガンは、従来の発達心理学で前提となる「分離」や「自律」を主体とした人間観を「正義の倫理」とし、その対抗原理として「ケアの倫理」、つまり「すべての人が他人から応えてもらえ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられるものは誰一人存在しないという理想像」(173-74) を打ち立てた。ギリガンは、「自身がケアと気遣いを向ける活動範囲に他者だけでなく自分自身も包摂することは『身勝手』な行為ではなく、むしろそれこそがケアの行為」であり、それへの気づきを通して「女性たちは家父長制の軛を解き外して」(9) いったと述べる。こうしたギリガンの提唱する「ケアの倫理」は、モリーの他者への応答を理解する上で重要な視座を与えてくれる。つまり、モリーは、他者との関係性を考える中で、他者に気遣いを向けつつ自分自身の発する内なる声を考慮の枠から排除することなく包摂している、自己の性やケアに焦点を当て、他者とのつながりに注目しつつ、自己をもケア関係の中に含めているのである。こうした態度は、従来の従属的なケアではなく、自己を考慮に入れながら他者を考慮する「ケアの精神」と言えよう。モリーの病をめぐる語りには、「家庭の天使」の「無私無欲」ではなくむしろ「私利私欲」的に自分の身体を中心とした他者への気遣いという未来へ向けたケアの形を読み取ることができると考える。

結論

本発表では、「病」と「ケア」の観点から *Ulysses* (1922) 第 18 挿話“Penelope”を再読し婦人科系の病を気にするモリーの姿を読み取ると同時に、その婉曲的で暗示的な表現からモリーの語りには 20 世紀初頭の医学言説に影響を受けた自己検閲がかかっていることを指摘した。一方、モリーの語りには他者への気遣いも含まれていて、それらは明示的であるものの、社会的にタブー視される性病に関しては仄めかすにとどめてられていた。そして、このようにモリーが自分の身体への不安を吐露しつつ、他者の病に意識を向けられる態度には、歴史的に女性たちが担わされてきた「無私無欲」なケアの概念とは異なる、自己を包摂した「ケアの精神」を見いだすことができると考えた。

モリーとブルームの夫婦関係に目を向けると、ブルームはモリーに朝食を運ぶケアラーだが、ブルームも老化を意識しダブリンの男たちや妻との関係性に悩むある意味ケアを必要としている人物で、この日ブルームは珍しくモリーに明日は朝食を自分のベッドで食べたいと自己主張する。そんな彼にモリーは、要求に応じてあげようと思ったり、身勝手だと腹立たしく思ったりもする。モリーとブルームは、家父長的な力関係ではなく相互依存的な関係を保っており、そこにはボイランとの間にある性的な力関係ではない、自分たちの身体の脆弱さを認めた上で子供たちをどうするかといったことも含めた、世代を超えた「ケアの精神」があると言えるのではないだろうか。

引用文献

Ferris, Kathleen. *James Joyce and the Burden of Disease*. UP of Kentucky, 1995.

James Joyce, *Ulysses*. 1922. Edited by Hans Walter Gabler et al., Vintage Books, 1986.

Plock, Vike Martina. “Jack the Ripper and the Family Physician: Gynaecology and Domestic Medicine in ‘Penelope’.” *European Joyce Studies 17: Joyce, “Penelope” and the Body*, edited by Richard Brown, Rodopi, 2006, pp. 129-43.

ギリガン、キャロル 『もう一つの声で——心理学の倫理とケアの倫理』、川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社、2022 年。